

佐伯鶴城新聞

since 1911

第55号

立城校部
集鶴学
編分伯等
大佐高
新

責任者
若松
編集
尾松

お互いがうまく共存できる関係に

駅ビルと商店街

第115回新聞研究大会が10月24日に、ホルトホール大分で行われた。今年度のテーマは「まち」。本校新聞部は昨年引き続き、駅ビル『JRおおいたシティ』と商店街のつながりに注目し、現地で取材をした。

昨年、駅ビル『JRおおいたシティ』と商店街のつながりに注目し、取材を進めた。駅ビル完成前には「商店街がシャッター街になってしまおうのでは」という不安の声と「共に商売する仲間として受け入れる」という前向きな意見も見られた。今回は、駅ビルが完成した今の商店街の現状を取材した。

竹町通りで飲食店を営む渡邊真也さんは「商店街が一体となって協力し、大きなイベントなどを開くとさらに賑やかになる」と

話す。また「竹町は、通るとしてもお年寄りの方がほとんど。活気を出すため、若者を多く呼び込めるようにしている」と話した。

靴屋で働く小川恵子さんは、駅ビルとのつながりについて「とても良い関係。人通りも多くなった」と話す。その理由を「駅ビル、商店街から新しく出来た美術館『OPAM』までの一連の流れが出来たため。お客さんが県外からも来て、見直してくれるようになった」と笑顔で話した。

また、駅ビル付近で20人に商店街の利用に関してのアンケートを実施した。「商店街を利用したことありませんか」との問いに「ある」と答えた人が19人いた。そのうち訪れる頻度に「変化なし」が18人、「減少」が1人であった。

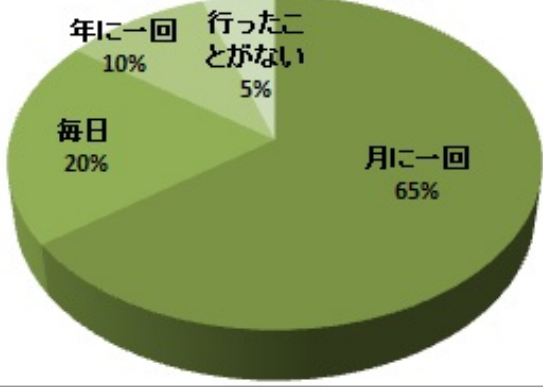
取材・アンケートを通して、不安の声とは裏腹に、駅ビルの影響で商店街も明るくなっていることが分かった。課題であった「駅ビルから商店街への流れの確保」が、クリア出来ているように思える。お互いがうまく共存する関係になるよう、これからもこの流れを絶やさないことが大事ではないだろうか。

(記事・木嶋 紗和子)



多くの人で賑わう駅ビル

商店街へ行く頻度



駅ビル前で取材した結果

新聞部が最優秀賞 科学部は優秀賞を受賞



喜びを分かち合う(新聞部)

第65回県学校新聞コンクールで最優秀賞を受賞した新聞部。そこで、部長の木嶋紗和子さん(二二)に話を聞いた。

今回の受賞について「地域の出来事にも目を向けたことが大きな要因だと思

う。評価を踏まえて今以上に良い紙面を届けたい」と語った。

第56回科学クラブ発表大会地学部門にて『撥水砂を用いた保水とその有用性の

解明』で優秀賞を受賞した科学部。

部長の後藤優友さん(二二)は「優秀賞はとることができた。昨年までの最優秀賞連覇を逃してしまっただけで残念だった」と語る。

(記事・川野 耕平)

ふと疑問に思った。ヒトの意識は、どこでつくられ、五感は何をどう把握しているのかという事だ。▼私たちの体は細胞から器官、そして個体と様々な単位に区切られる。一つの細胞や器官はプログラムされた行動を繰り返す。人類は、細胞や器官の働きを研究し解明する努力をしてきた。▼しかし、意識を形成するプロセスなどは未だ解明されていない。最近になって考えた自分なりの仮説だが、意識は実は私たちの中に存在せず、五感から得た情報には実体がなく信憑性もない▼なぜなら、五感から得た情報は刺激を電気信号に変えて認識するが、情報が真実なのかという証明など不可能だからだ。あえて証明することに挑む際には、正確に認識しているか分からない五感を認識の道具として使わざるを得ないからである▼こんな空論を机上で考えても、何の得にもなるのだろうか。多くの人は思うかもしれない。だが、今後逃れられない苦しみに遭った時、言い訳するような無駄な時間を過ごすのではなく、前文の述べた仮説で、「現実を起こった事は虚像なのだ」と割り切ってみよう。そうすれば、過去に執着せず、少しでも一歩前に進もうとする意欲が湧いてくるはずだ。

ズボンバトルで優秀賞 入試などに活かしたい

全国高校生ズビリオバトル北九州・山口大会が11月8日に、西南学院大学(福岡市)で行われた。本校を代表して出場し、優秀賞を受賞した榎佳澄さん(二二)に話を聞いた。

榎さんは、大会を振り返って「とても緊張したが楽しかった。本が好きなもの同士で語らうことは滅多にないので、貴重な経験なっ

た」と話す。

また「伊坂幸太郎さんの『夜の国のクーパー』という本を紹介した。より多くの人にこの本の魅力を分かってもらえるように頑張った」と語る。

最後に「大会そのものがあまり普及されていないので、参加したことが重要。今回身につけたことを、大学入試などに役立てていきたい」と話した。

(記事・木嶋 紗和子)



お気に入りの本と一緒に



中学生のとき、テストの点が悪く「これは夢だ。現実ではない」と言い訳を考えていると、ふと疑問に思った。ヒトの意識は、どこでつくられ、五感は何をどう把握しているのかという事だ。▼私たちの体は細胞から器官、そして個体と様々な単位に区切られる。一つの細胞や器官はプログラムされた行動を繰り返す。人類は、細胞や器官の働きを研究し解明する努力をしてきた。▼しかし、意識を形成するプロセスなどは未だ解明されていない。最近になって考えた自分なりの仮説だが、意識は実は私たちの中に存在せず、五感から得た情報には実体がなく信憑性もない▼なぜなら、五感から得た情報は刺激を電気信号に変えて認識するが、情報が真実なのかという証明など不可能だからだ。あえて証明することに挑む際には、正確に認識しているか分からない五感を認識の道具として使わざるを得ないからである▼こんな空論を机上で考えても、何の得にもなるのだろうか。多くの人は思うかもしれない。だが、今後逃れられない苦しみに遭った時、言い訳するような無駄な時間を過ごすのではなく、前文の述べた仮説で、「現実を起こった事は虚像なのだ」と割り切ってみよう。そうすれば、過去に執着せず、少しでも一歩前に進もうとする意欲が湧いてくるはずだ。